

共通教育機構の新英語カリキュラム による学習成果の検証 －OIDAI 英語力診断テストの分析結果から－

松宮 新吾・稲富百合子

Implementation and Validation of the New English Curriculum Designed
and Developed for the Institute of General Education:
Based on Statistical Test Analysis of OIDAI English Diagnostic Test

Shingo MATSUMIYA, Yuriko INADOMI

要旨

追手門学院大学では、1年生を対象として、共通シラバスを用いた対面による少人数授業で展開している総合英語と、フルオンライン科目で実施している Online English Seminar により、初年次英語教育の充実と推進を図っているところである。共通シラバスによる学習効果は、同一年度内においては定性的にも、また、定量的にも一定の効果があることが示されている。そこで、本研究においては、履修者が異なる2年間の教育効果を経年的、定量的に比較分析することにより、共通シラバスによる教育効果を検証するとともに、カリキュラムの評価を実施した。

本研究では、2年間で6回実施した「OIDAI 英語力診断テスト」のデータを分散分析を用いて解析した。その結果、2022年度生の学習成果が2021年度生に比べ有意に高くなっていることが判明した。このことから、3年目を向かえる共通シラバスによる新カリキュラムでの英語教育の成果が顕著になってきていることを確認することができた。

【キーワード】OIDAI 英語力診断テスト、分散分析、共通シラバス、教育効果、カリキュラム評価

1. はじめに（研究の目的）

追手門学院大学共通教育機構が所管する英語関係科目に関わる英語カリキュラムの改変と、そのカリキュラム評価や学習効果を検証するためのツールとして開発した「OIDAI 英語力診断テスト」について、松宮・稲富（2022）¹は、古典的テスト理論に基づく項目分析によるカリキュラムの定

1 松宮新吾・稲富百合子（2022）。「基盤教育機構外国語科目のカリキュラム改編に伴う教育効果の検証について（初年次報告）－授業展開事例と「OIDAI 英語力診断テスト」の実施検証－」, 追手門学院大学基盤教育機構論集, 第9号

量的評価の結果から「新カリキュラムによる英語学習の成果は、定量的にも一定レベル達成することができた」と評価している。また、カリキュラムの定性的評価分析の結果から、対面による英語学習での「自己有能感が有意に高くなっている」ことが報告されている。

本報告書においては、3年目を迎える新カリキュラムの評価と英語学習成果の検証を行うことを通じて、英語カリキュラムの今後の改訂やカリキュラムマネジメントに関わる情報を得ることを主たる目的とする。

2. 研究と分析の方法

2021年度に実施した3回の「OIDAI 英語力診断テスト」と、同じテスト項目内容と条件、環境で実施した2022年度の「OIDAI 英語力診断テスト」の結果を比較分析することにより、2021年度生と2022年度生の英語運用能力の実態を把握し、共通シラバスによる新カリキュラムの教育効果やその定着度合いを検証した。

なお、2021年度の7月に実施した秋学期末診断テストを構成するテスト項目は69項目であったが、2022年度の7月に実施した秋学期末診断テストは69のテスト項目から、項目分析の結果を反映し、語彙・表現問題を6題削除した63項目により構成された診断テストを実施した。そのため、本研究では、2021年度7月期の秋学期末診断テスト69項目のデータから、2022年度7月期の秋学期末診断テストで削除した6項目のデータを除外してデータ処理を行った。これにより、2021年度生と2022年度生の診断テスト結果を同一のテスト項目基準に基づき分析することが可能となった（表1）。

表1 OIDAI 英語力診断テストの問題項目一覧

問題項目	4月入学時	7月春学期末	1月秋学期末
リスニング問題数	19	36	32
語彙・表現問題数	13	7	9
文法・構文問題数	16	12	10
リーディング問題数	19	8	19
総問題数	67	63	70

分析に際しては、リスニング問題、語彙・表現問題、文法・語法問題と、リーディング問題、および、総合得点の各正答率を算出し、平均正答率の比較を行うために、年度を要因として2021年度生と2022年度生とで一元配置による分散分析を行った。

※ 号, pp.185-205.

3. 結果と考察

3.1 「OIDAI 英語力診断テスト」結果の概要

2021 年度生と 2022 年度生を対象に実施した 3 種類（4 月期診断テスト、7 月期春学期末診断テスト、1 月期秋学期末診断テスト）の 2 年間に渡る計 6 回のテスト結果の概要および年度別対比リストを表 2 に示す。表中の 22 は 2022 年度生を、21 は 2021 年度生を示す。また、「増減」のデータは、各テスト項目の正答率および合計正答率の年度差（2022 年度－2021 年度）を示したもので、白三角（△）はプラスを、黒三角（▼）はマイナスをそれぞれ示している。

表 2 2021 年度および 2022 年度生を対象に実施した「OIDAI 英語力診断テスト」の実施結果概要

	OIDAI診断テスト	度数	平均値	標準偏差	分散	最小値	最大値	増減
秋学期末	22_1月合計正答率	1437	39.94	16.69	278.44	4.30	100.00	△1.01
	21_1月合計正答率	1166	38.92	13.78	190.01	8.60	88.60	
	22_1月リスニング正答率	1437	41.79	18.50	342.12	3.10	100.00	△0.38
	21_1月リスニング正答率	1166	41.41	16.62	276.32	6.30	96.90	
	22_1月語彙・表現正答率	1437	37.03	18.89	356.76	0.00	100.00	△0.32
	21_1月語彙・表現正答率	1166	36.71	18.42	339.23	0.00	90.90	
	22_1月文法・構文正答率	1437	37.70	21.22	450.43	0.00	100.00	△1.46
	21_1月文法・構文正答率	1166	36.25	16.48	271.49	0.00	100.00	
	22_1月リーディング正答率	1437	40.23	22.31	497.72	0.00	100.00	△2.62
	21_1月リーディング正答率	1166	37.61	19.50	380.13	0.00	100.00	
春学期末	22_7月合計正答率	1470	38.98	13.88	192.72	0.00	98.40	△1.75
	21_7月合計正答率	1282	37.23	12.69	161.14	3.20	84.10	
	22_7月リスニング正答率	1470	39.52	15.14	229.18	0.00	100.00	△1.72
	21_7月リスニング正答率	1282	37.79	14.17	200.69	0.00	88.90	
	22_7月語彙・表現正答率	1470	44.53	19.16	367.14	0.00	100.00	△1.26
	21_7月語彙・表現正答率	1282	43.27	18.52	343.07	0.00	100.00	
	22_7月文法・構文正答率	1470	39.27	21.03	442.07	0.00	100.00	△0.59
	21_7月文法・構文正答率	1282	38.68	21.31	454.30	0.00	100.00	
	22_7月リーディング正答率	1470	33.52	21.29	453.16	0.00	100.00	△2.86
	21_7月リーディング正答率	1282	30.67	18.77	352.33	0.00	100.00	
入学時	22_4月合計正答率	1974	46.23	14.75	217.56	0.00	91.00	△0.57
	21_4月合計正答率	1652	45.66	15.74	247.72	0.00	91.70	
	22_4月リスニング正答率	1974	44.84	15.72	247.27	0.00	89.50	▼-0.69
	21_4月リスニング正答率	1652	45.53	16.71	279.12	0.00	96.20	
	22_4月語彙・表現正答率	1974	62.17	17.72	314.03	0.00	100.00	△3.00
	21_4月語彙・表現正答率	1652	59.17	17.99	323.81	0.00	100.00	
	22_4月文法・構文正答率	1974	34.33	17.86	319.01	0.00	100.00	▼-4.03
	21_4月文法・構文正答率	1652	38.35	20.73	429.67	0.00	100.00	
	22_4月リーディング正答率	1974	38.67	22.94	526.37	0.00	100.00	▼-2.82
	21_4月リーディング正答率	1652	41.49	23.38	546.81	0.00	100.00	

図 1 から図 6 に、各年度実施月別診断テストのヒストグラムを示す。これらの基本統計量を分析することにより、以下のことが明らかとなった。

- (1) 4 月期のデータ分析の結果、2021 年度生のほうが正答率 60%－80% を示す中上位層の学生が多く分布していることが判明した。
- (2) 7 月期のデータ分析の結果、2022 年度生において 60%－80% の正答率を示す中上位層が形成

されていることが判明した。

- (3) 1 月期のデータ分析の結果、2022 年度生において 80% 以上の正答率を有する上位層が一定数形成されていることが確認できた。

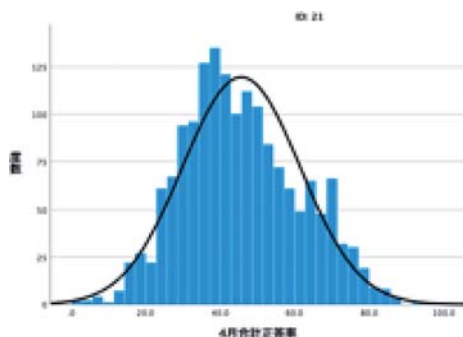


図 1 2021 年度 4 月期診断テスト

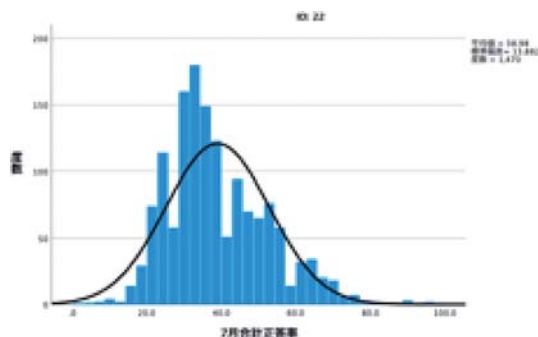


図 4 2022 年度 7 月期診断テスト

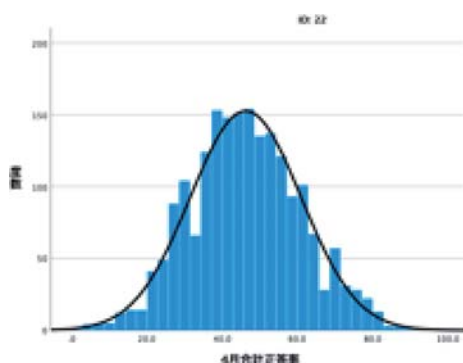


図 2 2022 年度 4 月期診断テスト

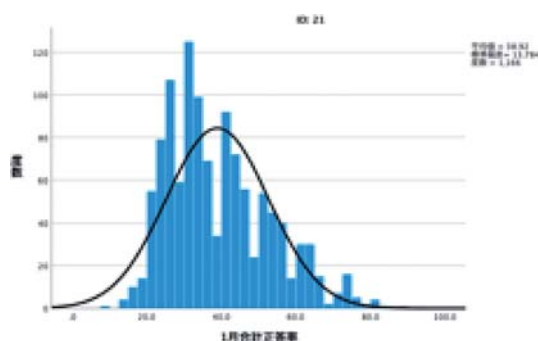


図 5 2021 年度 1 月期診断テスト

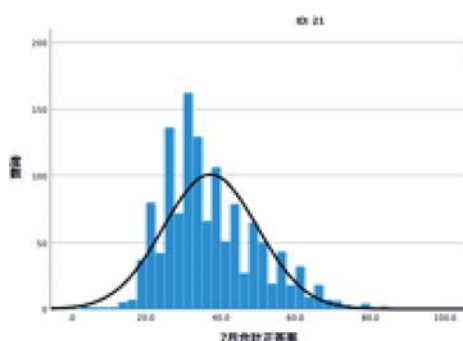


図 3 2021 年度 7 月期診断テスト

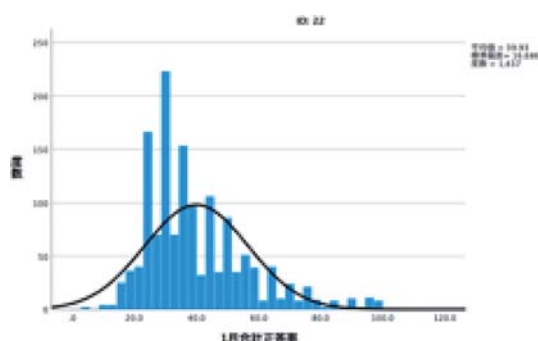


図 6 2022 年度 1 月期診断テスト

3.2 カリキュラムの評価および検証

2021 年度生と 2022 年度生がそれぞれ受験した 3 回の診断テストのデータを用いて、経年的にカリキュラムの実施状況を分散分析により評価・検証した。本報告書においては、各診断テストの合

計正答率と各診断テストを構成する下位テスト項目群（リスニング、語彙・表現、文法・語法、リーディング）の正答率を従属変数として、また、年次と診断テストの実施時期を要因として実施した一元配置分散分析の結果に基づき考察した結果をとりまとめる。

表3 2021年度生と2022年度生の「OIDAI 英語力診断テスト」の分散分析結果

OIDAI英語力診断テスト		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1月合計正答率	グループ間	662.03	1	662.03	2.77	0.096†
	グループ内	621192.94	2601	238.83		
	合計	621854.98	2602			
1月リスニング正答率	グループ間	93.29	1	93.29	0.30	0.585
	グループ内	813196.31	2601	312.65		
	合計	813289.61	2602			
1月語彙・表現正答率	グループ間	64.71	1	64.71	0.19	0.667
	グループ内	907519.84	2601	348.91		
	合計	907584.55	2602			
1月文法・構文正答率	グループ間	1367.40	1	1,367.40	3.69	0.055†
	グループ内	963112.11	2601	370.29		
	合計	964479.51	2602			
1月リーディング正答率	グループ間	4431.34	1	4,431.34	9.96	0.002**
	グループ内	1157576.79	2601	445.05		
	合計	1162008.12	2602			
7月合計正答率	グループ間	2106.19	1	2,106.19	11.83	0.001**
	グループ内	489530.51	2750	178.01		
	合計	491636.70	2751			
7月リスニング正答率	グループ間	2030.98	1	2,030.98	9.41	0.002**
	グループ内	593747.15	2750	215.91		
	合計	595778.13	2751			
7月語彙・表現正答率	グループ間	1087.31	1	1,087.31	3.06	0.081†
	グループ内	978807.71	2750	355.93		
	合計	979895.02	2751			
7月文法・構文正答率	グループ間	241.31	1	241.31	0.54	0.463
	グループ内	1231352.39	2750	447.77		
	合計	1231593.70	2751			
7月リーディング正答率	グループ間	5580.02	1	5,580.02	13.74	0.000**
	グループ内	1117032.92	2750	406.19		
	合計	1122612.94	2751			
4月合計正答率	グループ間	294.60	1	294.60	1.27	0.259
	グループ内	838219.20	3624	231.30		
	合計	838513.80	3625			
4月リスニング正答率	グループ間	424.04	1	424.04	1.62	0.203
	グループ内	948686.72	3624	261.78		
	合計	949110.76	3625			
4月語彙・表現正答率	グループ間	8073.39	1	8,073.39	25.35	0.000**
	グループ内	1154180.20	3624	318.48		
	合計	1162253.59	3625			
4月文法・構文正答率	グループ間	14576.39	1	14,576.39	39.46	0.000**
	グループ内	1338794.84	3624	369.43		
	合計	1353371.22	3625			
4月リーディング正答率	グループ間	7141.24	1	7,141.24	13.33	0.000**
	グループ内	1941301.12	3624	535.68		
	合計	1948442.36	3625			

3.2.1 入学時点（4 月期）における英語運用能力について

2021 年度生と 2022 年度生の入学時点での英語運用能力を、対応なしの一元配置分散分析で比較

した。結果は、 $F(1,3624) = 1.27, p = .259$ となり、有意差は認められなかった。しかし、診断テストの下位テスト項目群のうち、リスニングを除く、語彙・表現 ($F(1,3624) = 25.35, p = .000$)、文法・構文 ($F(1,3624) = 39.46, p = .000$)、リーディング ($F(1,3624) = 13.33, p = .000$) 項目群においては 1% 水準での有意差が認められた (図 7、8、9)。

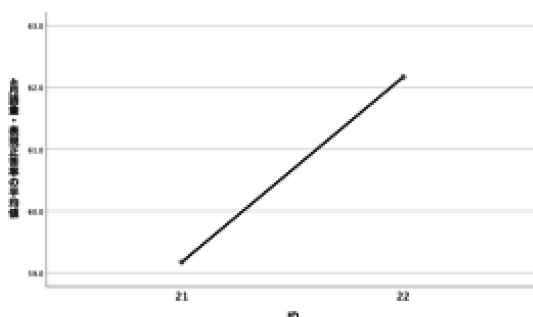


図 7 4 月期語彙・表現テスト項目群の平均値

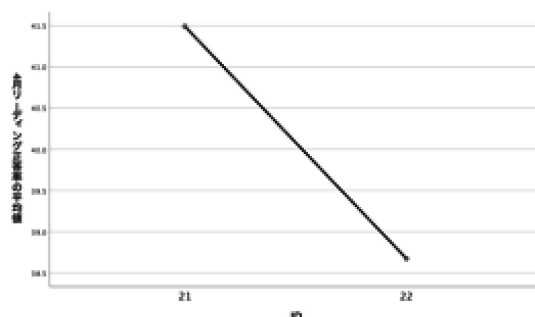


図 9 4 月期リーディングテスト項目群の平均値

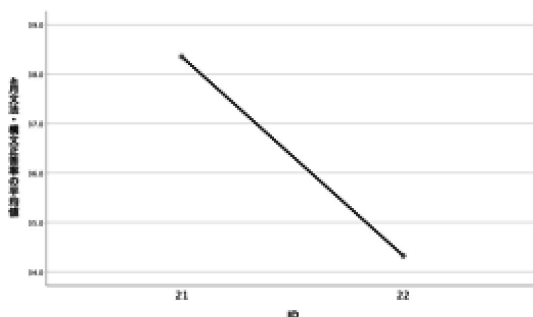


図 8 4 月期文法・構文テスト項目群の平均値

この結果から、診断テストにより測定することができる総合的な英語運用能力において 2021 年度生と 2022 年度生との間には有意な差は認められなかったものの、文法・構文力およびリーディング力においては、2022 年度生が有意に低くなっていることが判明した。一方、語彙・表現力においては、2022 年度生が有意に高くなっていることがわかった。

3.2.2 春学期末 (7 月期) における英語運用能力について

2021 年度と 2022 年度の各春学期末 (7 月期) に実施した「春学期末 OIDAI 英語力診断テスト」の結果を、対応なしの一元配置分散分析で比較検証した。総合得点における分析結果は、 $F(1, 2750) = 11.83, p = .001$ となり、1% 水準の有意差が認められた。これにより、入学時点では有意差が認められなかったものの、改訂された共通シラバスを用いてワンセメスターの授業を展開した 2022 年度生の英語運用能力が有意に高まったことを確認することができた (図 10)。

また、診断テストの下位テスト項目群のうち、リーディング ($F(1,2750) = 13.74, p = .000$) 項目

群においては1%水準での有意差が認められ、2022年度生のリーディング力が有意に高くなっていることが確認できた(図11)。さらに、語彙・表現($F(1,2750)=3.06, p=.081$)項目群においては有意傾向であることが示され、2022年度生の語彙・表現力が引き続き高まっていることが判明した(図12)。

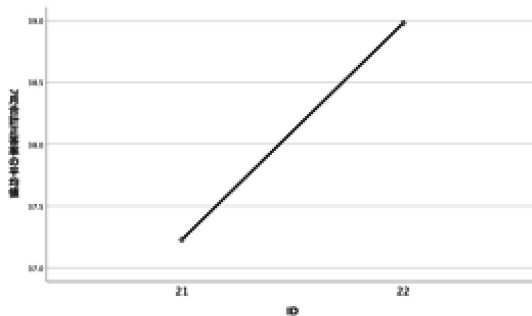


図10 7月期合計正答率の平均値

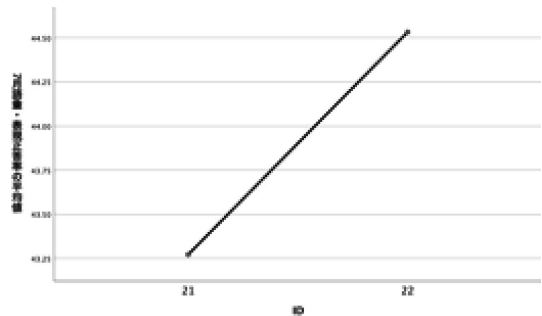


図12 7月期語彙・表現項目正答率の平均値

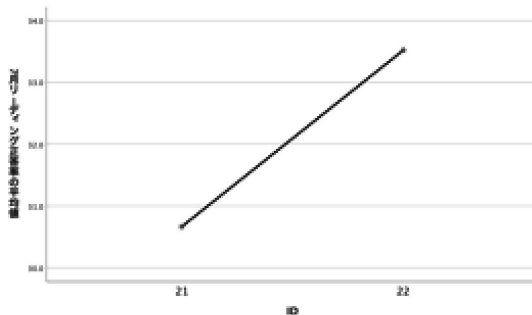


図11 7月期リーディング項目正答率の平均値

3.2.3 秋学期末(1月期)における英語運用能力について

2021年度と2022年度の年度末(1月期)に実施した「秋学期末 OIDA I 英語力診断テスト」の結果を、対応なしの一元配置分散分析で比較検証した。その結果、総合得点においては、 $F(1, 2601)=2.77, p=.096$ となり、有意傾向であることが認められた(図13)。

これにより、改訂版の共通シラバスによる1年間の英語教育の成果が有意傾向として出現していることから、一定レベルの教育効果が認められたものと考えられる。特に、リーディング力については、 $F(1, 2601)=9.96, p=.002$ となり、2021年度生と2022年度生との間に1%水準の高い有意差が生じており、2022年度生のリーディング力が有意に高まっていることを確認することができた(図14)。また、文法・構文力においては、 $F(1, 2601)=3.69, p=.055$ で、2022年度生に有意傾向が認められた(図15)。

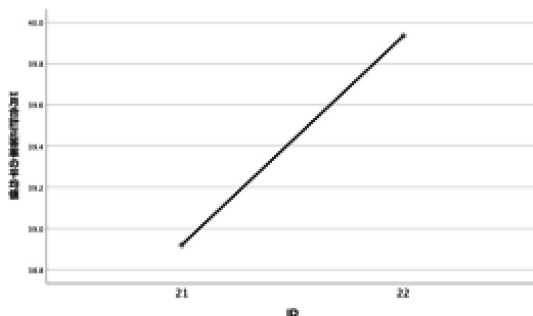


図 13 1 月期合計正答率の平均値

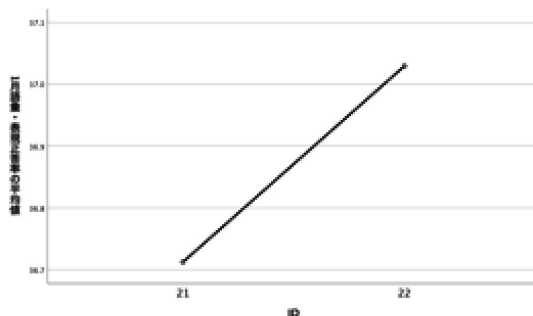


図 15 1 月期語彙・表現項目の平均値

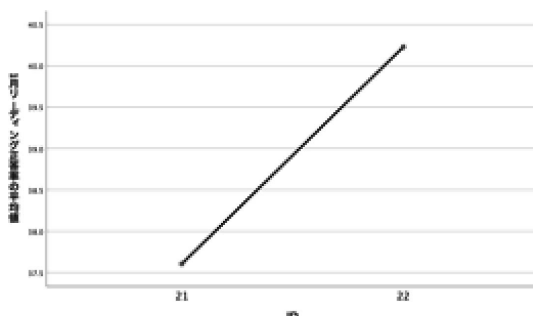


図 14 1 月期リーディング項目の平均値

以上の考察から、入学時点で総合的な英語運用能力においては有意差が認められなかったものが、7 月期においては 1% 水準での高い有意差が、また、1 月期においては有意傾向が認められるなど、3 年目となる新カリキュラムは、年次毎に改訂を図っている統一シラバスにより、好ましい教育成果を生み出すことができるレベルにまで定着し、展開されていることが確認できた。

今後は、英語運用能力の下位項目である語彙・表現力やリスニング力を一層引き延ばすための教材開発や教授法等の研究開発を行い、年間を通じたカリキュラムマネジメントの在り方や共通シラバスの改訂等にこの分析結果を活かすことが期待される。

4. 「OIDAI 英語力診断テスト」の妥当性について

本研究において、カリキュラムと共通シラバスの評価、および、学習成果の検証のためのツールとして用いている独自開発した「OIDAI 英語力診断テスト」の外的妥当性を、1 月期に希望者に対し受験機会を与えている TOEIC Bridge Listening & Reading Tests のテストスコアとの相関分析を行うことにより検証した。

2021 年度生は 298 名の学生が、2022 年度生は 549 名の学生が受験を希望し、年度末となる 1 月期に TOEIC Bridge Listening & Reading Tests の受験を完了している。本研究では、各年度で実施した 1 月期の「OIDAI 英語力診断テスト」の結果とを掛け合わせ相関係数を算出した（表 4、5）。

表 4 2022 年度生の TOEIC Bridge Tests と 1 月期「OIDAI 英語力診断テスト」との相関

2022年度生	項目	TOEIC Bridge	1月合計 正答率	1月リスニン グ正答率	1月リーディ ング正答率
TB_Listening	Pearson の相関係数	.940**	.468**	.491**	.344**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数	549	456	456	456
TB_Reading	Pearson の相関係数	.947**	.517**	.497**	.420**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数	549	456	456	456
TOEIC Bridge	Pearson の相関係数	1	.524**	.525**	.407**
	有意確率 (両側)	-	0.000	0.000	0.000
	度数	-	456	456	456
1月合計正答 率	Pearson の相関係数	-	1	.922**	.803**
	有意確率 (両側)	-	-	0.000	0.000
	度数	-	-	1437	1437
1月リスニン グ正答率	Pearson の相関係数	-	-	1	.622**
	有意確率 (両側)	-	-	-	0.000
	度数	-	-	-	1437
1月リーディ ング正答率	Pearson の相関係数	-	-	-	1
	有意確率 (両側)	-	-	-	-
	度数	-	-	-	-

表 5 2021 年度生の TOEIC Bridge Tests と 1 月期「OIDAI 英語力診断テスト」との相関

2021年度生	項目	TOEIC Bridge	1月合計 正答率	1月リスニン グ正答率	1月リーディ ング正答率
TB_Listening	Pearson の相関係数	.666**	.632**	.583**	.391**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.000	0.000
	度数	298	282	282	282
TB_Reading	Pearson の相関係数	.860**	.223**	.171**	.173**
	有意確率 (両側)	0.000	0.000	0.004	0.003
	度数	298	282	282	282
TOEIC Bridge	Pearson の相関係数	1	.498**	.433**	.335**
	有意確率 (両側)	-	0.000	0.000	0.000
	度数	-	282	282	282
1月合計正答 率	Pearson の相関係数	-	1	.901**	.737**
	有意確率 (両側)	-	-	0.000	0.000
	度数	-	-	1166	1166
1月リスニン グ正答率	Pearson の相関係数	-	-	1	.526**
	有意確率 (両側)	-	-	-	0.000
	度数	-	-	-	1166
1月リーディ ング正答率	Pearson の相関係数	-	-	-	1
	有意確率 (両側)	-	-	-	-
	度数	-	-	-	-

相関分析の対象としたデータは、TOEIC Bridge Tests の受験と同時期の 1 月期に実施した秋学期末診断テストのデータである。分析の結果、兩年度に実施した診断テストと TOEIC Bridge Tests のテストスコアとの間には、1% 水準での有意な正の相関があることが確認できた。また、相関の強さは、中程度（2021 年度： $r = .498^{**}$ 、2022 年度： $r = .524^{**}$ ）であることがわかった。

特に、2021 年度生よりも 2022 年度生のテストデータによる相関係数が高くなっていることから、改訂された統一シラバスで英語の授業を履修している 2022 年度生に育成されている英語運用能力は、グローバルスタンダード指標と照らし合わせても親和性が一定レベル担保されているものと考えられる。

以上の考察から、新カリキュラムの構想に基づき展開している共通シラバスを必要に応じて改訂しつつ、教材の継続的な研究開発や教授法の工夫等、共通教育機構が所管する英語教育の不断の改善を図りながら教育の質保証を行うことが期待される。そのためには、診断テスト等を用いた教育成果やカリキュラムの評価を継続的に実施し、よりよい英語教育環境を構築することが求められる。

次に、共通シラバスによる英語教育実践を通じて好ましい教育成果を生み出している各授業の実践事例を報告する。

5. 授業実践例

共通教育機構英語チームが開講する「総合英語」（対面授業）と「Online English Seminar」（オンデマンド授業）では、7 学部全体で共通教材を用いた共通シラバスによるコーディネーションを行い、全てのクラスにおける一定水準の教育の質を担保している。また、両者をセット科目として位置づけることにより、英語 4 技能の向上における相乗効果が期待されている。詳細については、「基盤教育機構外国語科目のカリキュラム改編に伴う教育効果の検証について（初年次報告）－授業展開事例と「OIDAI 英語力診断テスト」の実施検証－」を参照されたい。

「総合英語」では、昨年度のシラバスに一部改訂を行い、引き続き Web 教材『ABLish』（チエル株式会社）を使用し、その中から SDGs に関連する 17 の到達目標をトピックスとした記事を毎週 2 本ずつ取り扱った。『ABLish』をもとに開発した補助教材「総合英語テキストノート 1/2」の内容について、今年度は協議を重ね、さらに補助教材の充実を図った。

「総合英語テキストノート 1/2」に所収されている内容は、昨年度のものをベースに、授業担当教員の意見や要望を反映させ、エッセイやスピーキングの指導に有益な資料や、英作文（重要構文・文法）の練習問題を追加し、さらに、学生の自律学修を促すための課題チェックリスト欄を設けた。具体的には、『ABLish』の記事（Basic/Advanced Version）、及びその記事に対する「学習指針」、「リーディング・リスニング教材 1/2」、「理解度問題」、「ディスカッショントピックスおよびエッセイ（レポート）課題のテーマ」、「語彙・表現リスト」、「表現演習（重要構文を用いた英作文の練習問題）」、「リフレクション・シート」そして、「Unit 課題（タスク）のチェックリスト」から構成されている。なお、この「総合英語テキストノート」の各項目は LMS（WebClass）と連動

させ、課題の提出及び管理は LMS 上で行った。

これらの教材は、全てのクラスにおける授業の均一化を図り、一定水準の教育の質を担保することを目的としているわけだが、各教員が、担当クラスの学部学科の特性を生かしながら、授業運営ができるようデザインしている。つまり、エッセイのテーマを一部変更したり、エッセイを手紙文形式に変更したりするなど、臨機応変に学生の関心に寄り添う内容に改変することが認められている。また、ディスカッションやエッセイにおいて共通のテーマを扱っていても、自ずとクラスや学部のカラが生まれ、担当教員の専門性などが反映された取り扱いがされているという意見も教員から挙がっている。例えば、社会学部のスポーツのクラスの場合、SDGs#3 の「Good Health and Well-being（全ての人に健康と福祉を）」で取り上げた記事“Swimmer Triggers Interest in Marrow Donor Registration”（「競泳の池江選手、白血病公表で骨髄ドナー登録への関心高まる」）について反響があり、ディスカッションで骨髄移植手術の難しさの現状をリサーチした上で、エッセイのテーマである骨髄バンクへのドナー登録を勧める広告ポスターの作成に効果的に繋げることができたという報告例や、SDGs #5 の「Gender Equality：ジェンダー平等を実現しよう」では、トランスジェンダー選手の五輪出場をめぐる浮き彫りとなった多様な性を認めると同時に競技の公平性とは何かについて考えるきっかけを独自にディスカッションで提供した事例など、各教員によるクラス毎の議論の展開に工夫が見られた。以上のことから、学部毎に異なる学生の関心が、ディスカッションやエッセイのテーマに対する学生からの回答に多様性を生み出していることが確認されている。このことは、「総合英語」の教育目標の一つとして設定している「学部・学科の基礎専門領域内容との有機的なリンクを図ること」に合致したもので、柔軟かつ自在に教育コンテンツを開発し提供することができていることを示す事例である。

「総合英語」では、毎週エッセイに取り組ませているが、秋学期から「総合英語テキストノート」の巻末にエッセイを書くための英語の文章構成の基礎知識に関する参考資料を掲載した。それにより、学生がモデルエッセイや表現集（資料）を参考にしながら、序論・本論・結論の役割や構造を認識し、また、「1 パラグラフ＝1 メインアイデア」を元に文章構成のパターンを理解し、適宜「シグナルワード」を用いてエッセイを書くことができるように導いた。また、ディベートにも役立つ賛成意見や反対意見の述べ方に特化した資料も掲載した。これらの資料は、指導する側の教員からも好評であった。教員によっては、学生にエッセイの基礎を定着させることを目的とし、クラスのレベル等に応じて、週毎に序論、本論、結論のいずれかだけに焦点を当てて英語で文章を書く指導を行った例も報告された。また、手紙の書き方についても、今後学生がビジネスシーン等で英文メールのやり取りをすることを想定し、エッセイの場合と同様、「総合英語テキストノート」にモデルレターや表現集（資料）を掲載した。「総合英語テキストノート」の資料が有効活用され、春学期と比較すると、エッセイ及び手紙の書き方の上達が顕著に見られたという報告を受けた。

昨年度も効果的であったエッセイの指導例としては、授業内で、各学生がパワーポイントを使用して作成したエッセイを授業内で公開し（氏名は非公開）、各自が積極的にクラスメイトのエッセイの優れた点を取り入れるように指導する方法である。時には、授業内で学生自ら説明させること

もあった（その場合は授業で説明を求める旨を学生に事前連絡しておくことが望ましい）。学生が書いたエッセイを紹介し、さらに分かりやすく言い換えることができるように、複数の例文を紹介し、学生に例文をストックさせた。回を重ねるごとに、イラスト・写真やグラフ、データ等のヴィジュアル・エイドを効果的に挿入するエッセイも増えてきた。

また、エッセイ課題にはポスターの作成もあり、例えば食育月間のポスターや、ボランティアの清掃活動の案内ポスターをパワーポイントで作成する課題は、学生の独創性が発揮され、アイデア満載のポスターが披露された。毎週地道に課題に取り組む姿勢により、学生が互いに良い点を吸収し合い、アウトプットすることの喜びや自信に繋げていく過程を実感することができた。

その集大成が、最終授業日のプレゼンテーションである。プレゼンテーションは、個人またはグループで実施したが、「総合英語」のテーマである SDGs から一つ目標を選び、自由な発想を求め、調査・報告を行わせた。学生たちは、パワーポイントによるヴィジュアル・エイドを効果的に使用し、通常のエッセイで鍛えたスキルを踏襲して、プレゼンテーションに臨んだ。たとえ同じテーマを選んでいても、グループにより全く視点の異なる発表がなされ、一つのテーマが重層的に厚みを増す結果となった。なかでも、英国ロイヤルファミリーの SDGs に関連した取り組みの例は、ピアレビューでも評価が高かった。例えばサステナブル・ファッションやエシカル・ファッションの例として、故フィリップ殿下が長年愛用した靴のエピソードや、ファッションアイコンとしてのキャサリン皇太子妃のポリシー等、物を大切に扱うことと環境保護活動を関連付けて発表しており、学生の創意工夫に富んだ発表に学生同士が感銘を受けていた。最後にピアレビューをもとに各自フィードバックをさせたが、一年間にわたるコンテンツ科目としての「総合英語」を通して、学生の成長を実感できる結果となった。なお、ピアレビューとフィードバックは LMS (WebClass) 上で行い、瞬時に学生同士が意見交換をできるようにした。なお、「総合英語 2」のプレゼンテーションタスクの参考となるように、2022 年度追手門学院大学国際教養学部・国際学部杯 OIDA SDGs Initiative Presentation Contest で最終 4 組に選抜されたファイナリストのプレゼンテーションビデオ (YouTube 動画) を、各クラスで紹介した。学生からもこれらの動画が参考になったという意見が寄せられた。

また、「総合英語テキストノート」の改編が功を奏したと思われるのが、「表現演習」の項目である。そもそもパラグラフライティングの指導の前に、センテンスレベルの指導も必要だという意見が教員から寄せられたことを受け、『ABLish』の記事に出てくる重要構文・文法を定着させるために、Unit 毎に複数の練習問題を準備した。センテンスレベルの英作文をドリル形式で行うことにより、英語表現のストックが可能となり、エッセイの課題でも役立てることができた。教員によっては、「表現演習」で学習した構文を必ず使用するよう指示をしたという指導例もある。LMS 上では、ネイティブスピーカー教員による音声ファイルも付け、ディクテーションの練習問題としても取り組ませた。問題形式は、整序問題や穴埋め問題であったが、解説を読み、理解した上で音声ファイルを再生し、発音練習をするよう促した。クラスによっては、「表現演習」と「音声録音課題」をリンクさせることにより、両者の課題提出率も高くなった。つまり、毎週の音声録音課題を

「表現演習」の中から4～5題指定することで、先にLMS上で「表現演習」に取り組み、発音練習をした上で、録音しLMS上に提出させる流れを作り出した。音声録音の課題チェックでは、学生の多くが間違う発音等が確認でき、授業内で正しい発音を再確認する指導ができた。

音声録音課題については、「Online English Seminar」でも毎週実施した。毎週共通教育機構英語チームが発行しているNewsletterの一項目に、「This week's idiom」のコーナーがあるが、E-CO (English Café at Otemon) の教員が作成した英会話に音声ファイルを付けてLMS (KnowledgeDeliver) 上で提供している。「総合英語」の授業でも、この「This week's idiom」の英会話をペアワークで練習させることはスピーキングの指導法として効果的である。なお、「Online English Seminar」では今年度もWeb教材『Practical English 8』(EdulinX)を使用した。

「総合英語」では、定期試験を実施しない代わりに、毎週の授業での学習成果が評価されるため、学生も複数の課題を自己管理しなければならない。したがって、教員側も根気強く学生を励まし続ける必要がある。学生に調査すると、エッセイの課題に一番時間を割いているという回答が多く、エッセイに要する時間は30分から1時間程度と答える学生も多くいた。これは、毎週学生が英語と向き合う時間を必ず確保していることの証しである。また、ある教員が「総合英語」の課題について担当クラスで行ったアンケートによると、「どの課題が英語力を伸ばす上で役に立ったと思うか」という問いに対して、「語彙・表現復習テスト」、「プレゼンテーション」、「単語帳」、「エッセイ」、「表現演習」の順番で挙げられ、残りの「音声録音課題」「理解度クイズ」「ディスカッション」は同列であった。学生自身が、課題に取り組む中で、英語力が向上しているという実感を持っていたことが分かる例として報告を受けた。

このように、毎週継続して課題に取り組んだことで英語力の向上を実感したという学生の感想は、先に述べた通り、3回実施した「OIDAI 英語力診断テスト」、及び希望者を対象としたTOEIC Bridge Testsの結果の分散分析とも通底するだろう。2021年度生と2022年度生の成績を比較すると、後者の成績が上昇していることが分かる。特に、7月（春学期末）実施分では、「語彙・表現正答率」が、また1月（秋学期末）実施分では、「文法・語法正答率」に有意差があることが判明し、それぞれ2022年度生の正答率が有意に高くなっていることが確認できた。入学時において、2021年度生と2022年度生の成績に有意差は認められなかったが、「OIDAI 英語力診断テスト」及びグローバルスタンダードであるTOEIC Bridge Testsの結果によると2022年度生の英語運用能力は、2021年度生と比較して高くなっている（有意傾向である）ことが分かった。これは、新カリキュラムに移行し、今年度は共通シラバスの一部改訂と共通教材に基づいた「総合英語テキストノート」の一部改編により、授業の工夫改善が行われ、「総合英語」及び「Online English Seminar」の授業の成果が一定レベル定着したことを証明するものであろう。

最後に、TOEIC Bridge Testsの受験者数の増加については、2022年度生の受験者数は2021年度生のおよそ倍であった。それは社会学部では受験が義務付けられていたことも一つの要因であるが、受験案内の周知を「総合英語」の授業でも繰り返し行ったことによるものである。また、英語チームで案内チラシの作成を行い、IIBCの日野翔太氏と吉村智樹氏に受験案内の動画作成を依頼

し、その動画を「総合英語」の授業で視聴させることで、TOEIC Bridge Tests の受験の意義について認識させたことも功を奏したと考えられる。今後とも、TOEIC Bridge Tests の受験が英語学習の動機づけの一要因になることが期待される。次年度は、カリキュラムの改編 3 年目に入るが、教育効果の検証を継続的に行っていく必要がある。そのためにも、「OIDAI 英語力診断テスト」と TOEIC Bridge Tests の受験は必要不可欠となる。

以上、追手門学院大学共通教育機構の共通シラバスによる英語教育の成果を報告書としてとりまとめた。分散分析の結果、有意差として現れた英語教育の成果を生み出している最も重要な要因は、日常的に対面授業やオンライン授業を通じて学生を指導していただいている専任、常勤講師、非常勤講師の皆様の教育力である。このことを再認識するとともに、本報告書で感謝の意を表したい。

引用文献

- 上田恒雄 (2009). 「CASEC と TOEIC の相関に関して (1)」, 愛知学院大学文学部紀要 (38)、pp.115-123.
- 松宮新吾・稲富百合子 (2022). 「基盤教育機構外国語科目のカリキュラム改編に伴う教育効果の検証について (初年次報告) –授業展開事例と「OIDAI 英語力診断テスト」の実施検証–」, 追手門学院大学基盤教育機構論集, 第 9 号, pp.185-205.